原　著

高機能自閉症者のパニック軽減についての一考察
——事例Kを通じて——

高木徳子* 折笠美穂** 高島美穂***

An Attempt to Reduce Panic Behaviors in
a High Functioning Autistic Adult.
—A Case Study of K—

SUMMARY

Autistic children and adults easily panic when they cannot handle a particular situation. Resulting panic behaviors repulse surrounding people such as classmates and neighbors, which may lead to isolation of the autistic individual. Therefore, reducing an autistic person's panic behaviors has the potential to make him or her more acceptable to society. As one method to reduce panic behaviors we chose to improve communication by introducing a cellular phone capable of e-mail communication.

The case was a 27-year autistic man, who had graduated from high school. He had a high level of language skill although his conversational skill was quite limited (referred to as "K" hereafter). When K had trouble in crowd of people, he loudly asked for help if somebody who he knew was nearby. When K could not communicate well, he repeated the same words or question many times. In a panic situation K swung his arms widely and sometimes waved his hand so vigorously that the fingers bounced against one another and made a loud tapping sound. ((His therapists could do nothing but patiently listen to his explanation about these behaviors after he had calmed down.))

We arranged for K to use a cellular phone to communicate with his mother through e-meil when he had trouble or could not select among available items in a choice situation such as in a store. Six months later he began to communicate with his previous and current therapists, and his e-mail messages gradually became more comprehensible.

Over one and half years after he started using the cellular phone, the following changes were noted:

1) Reduced incidence of panic behaviors,
2) More willing to talk or send e-mails about the cause of his panic behaviors,
3) Improved verbal and e-mail expression of feelings and emotional upset and
4) Increased frequency of approaching people using phrases such as"Would you like to …" or "I think it will be fun to…."

Thus, we demonstrated that e-mail communication using a cellular phone may reduce panic behaviors and enrich language expression in high functioning autistic adults.

I　はじめに

高機能自閉症児・者は，知的能力の高さから学習面でつまずきが少ないために，治療教育が見過ごされてしまうことが多いが，学校教育場面において，様々なトラブルを起こしたり，教師を戸惑わせる存在である。また，彼らは，青年期以降，学校という保護された『受け身の世界』から一般社会に出た時に，強いこだわりや問題行動のために，就労ができなかったり続かない等，社会人として生きていくのに深刻な問題に直面している。

自閉症児・者の社会への適応を阻んでいる問題行動の一つにパニックがある。パニックは彼らの同一性保持の強い欲求・固執性からの二次障害として生じてくる場合と，予測できないことが急に起こった時の不安により起こってくる場合が挙げられる。

高機能自閉症者が，基本的生活習慣を身につけ，日常的には，援助をあまり必要としなくても，パニック行動を持ち続けたり，細部でのコミュニケーション・対人関係のまずさのために抱える課題は，まだまだ多く，その部分での援助が必要である。

本研究においては，このような彼らのコミュニケーション能力・対人関係の向上とパニック軽減のために，事例Kを通して，本人が判断に窮した時，注意された時などの怒りの爆発を受けとめるのに有効であったEメールによるコミュニケーションについて報告したい。

II　事例の概要

1．対象者K

高機能自閉症者（WISC-R：IQ128，WAIS-R：IQ94），男性，27歳，共同作業所通所者。

＊京都女子大学家政学部教授（児童心理学）
Noriko Takagi
＊＊京都女子大学児童学科
Miho Orikasa
＊＊＊京都女子大学児童学科
Miho Takashima

2．知能テスト結果

Kの知能テスト結果は，**表1**に示す。

WAIS-Rと高校時に行なったWISC-Rとの結果のプロフィールを**図1**に示す。

図1でわかるように，WAIS-Rで平均以上の得点があるのは，言語性検査の下位検査では，知識(11)，数唱(11)，類似(10)，動作性検査の下位検査では，絵画配列(14)，積木模様(13)，組合せ(12)である。

平均より得点が低いのは，言悟性検査の下位検査では，単語(7)，算数(8)，理解(2)，動作性検査の下位検査では，絵画完成(9)，符号(5)である。

知識と数唱はWISC-Rでも平均以上の得点である。数唱は，ただ機械的記憶力がいいというだけといえるかもしれないが，知識はKが日常，日本語百科事典を見てることや新聞や書物により身についたものと思われる。瀬戸屋雄太郎の論文においてもアスペルガータイプは同様に高得点であった。

絵画配列は物語のストーリーを考えるものであるため国語が苦手なKは得点が低いと予測されたが平均より高得点であった。積木模様，組合せと同様言語表現力が未熟でも視知覚的力があり点がとれたと思われる。同じように視知覚的な力を必要とする絵画完成は，それぞれのものの細部まで知覚していなければ，欠損部分を見つけることは困難なため，高得点は得られなかった。単語，理解は瀬戸屋雄太郎の論文のアスペルガータイプと同様に低い得点であった。単語，理解で求められていることは，単なる知識ではなく，単語の意味説明や日常行動のことの説明で，言語表現能力が問われており日常の言語表現力の乏しいKには難しかったと思われる。

3．家族構成

母方祖父，母，本人の3人暮らしである。

母親50歳，会社役員。仕事や行動はテキパキしており活発な人である。おおらかな性格でスポーツクラブなどでの若い人の面倒見がよく慕われている。

表1. WISC-R、WAIS-R　知能検査結果

言語性検査	粗点		評価点		動作性検査	粗点		評価点	
	WISC-R	WAIS-R	WISC-R	WAIS-R		WISC-R	WAIS-R	WISC-R	WAIS-R
1 知　識	24	19	11	11	2 絵画完成	21	13	6	9
3 類　似	18	17	7	10	4 絵画配列	46	21	16	14
5 算　数	18	13	14	8	6 積木模様	62	51	16	13
7 単　語	40	22	7	7	8 組合せ	31	39	13	12
9 理　解	15	6	5	2	10 符　号	69	49	12	5
11 数　唱	21	18	13	11	12 迷　路	29	−	13	−

言語性ＩＱ（VIQ）　WISC-R：109　WAIS-R：88
動作性ＩＱ（PIQ）　WISC-R：141　WAIS-R：103
全検査ＩＱ（IQ）　WISC-R：128　WAIS-R：94

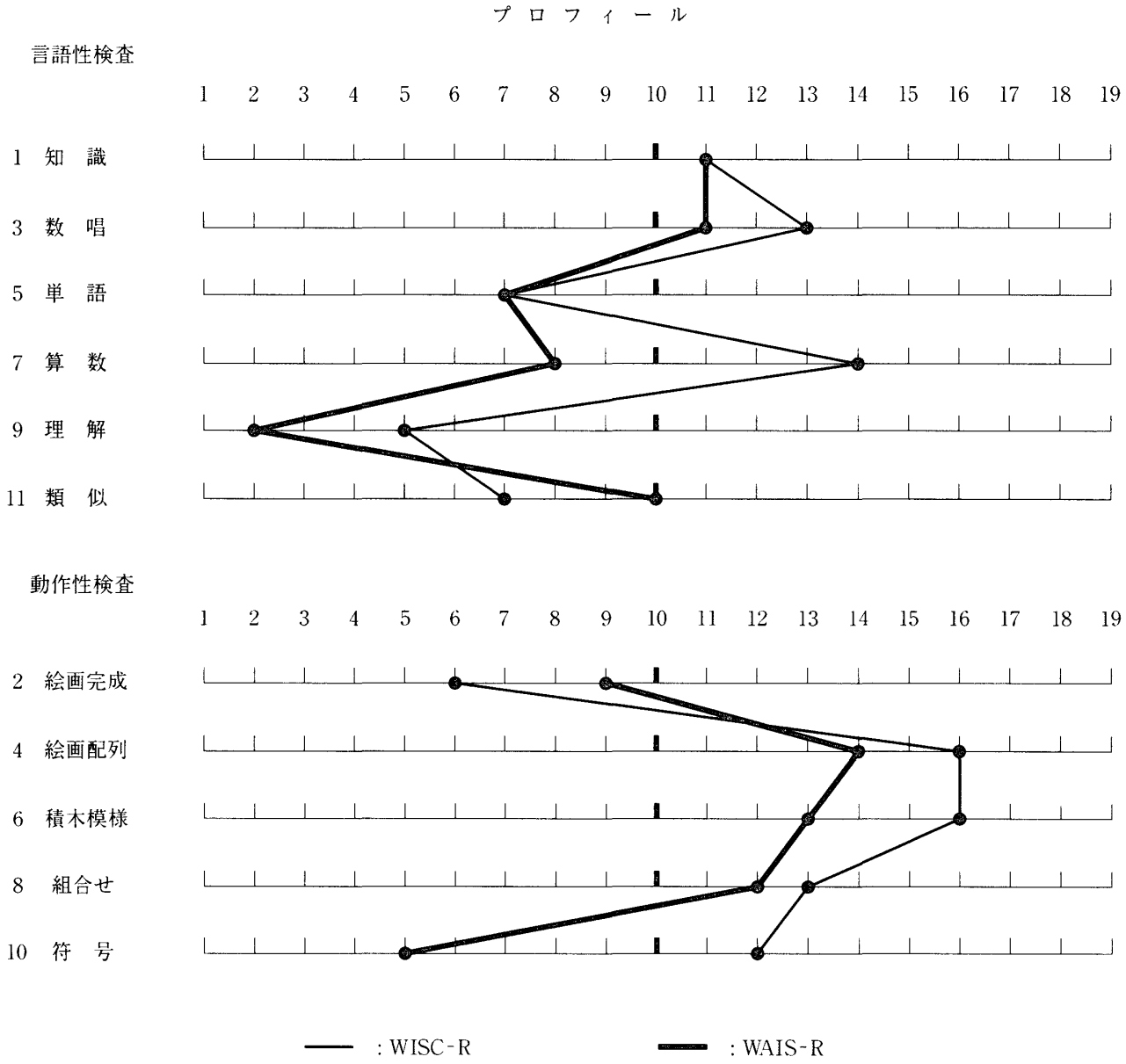

図1. WISC-R、WAIS-R　知能検査プロフィール

母方祖父80歳，Kに甘く優しい人であったが，最近は老化のために頑固さが増し，Kと些細な事で衝突を起こしている。

平成11年4月に亡くなった母方祖母とも生前は同居しており，Kにとっては甘えられる存在であった。

4．生育歴およびパニック歴

(1) 乳幼児期

母親妊娠中，特記すべき疾病外傷なく正常分娩（生下時体重2500g）。首のすわりは3ヵ月，初歩は1歳3カ月過ぎ，始語は1歳半に〈マンマ〉であった。その後，ことばは増えず，3歳から通っていた保育園で「ことばの遅れ」の指摘を受け，児童相談所の紹介を経て別の幼稚園へ転園した。

Kは，祖父母・母に非常に可愛がられ，自然に周りの者がKの好みに合わせた環境を作り上げていった。また，保育園，幼稚園でもKは，周りに無関心・無頓着であり，多動であったが，先生がついてまわって世話をしたため多動を阻止されることは殆どなかった。

(2) 小学校

小学校は普通学級に在籍。

小学校1・2年時は，殆どしゃべらず，多動も残っていた。教師に行動を修正されつつも，大きく強制されることはなく，周りの者がKの行動に合わせる傾向があった。学校での時間割りや決まりがKの中で根付いておらず，突発的なことや変化があっても，Kは平気であった。このように，Kは教師や仲間に強制されることもなく，受けとめられながら3生時には集団生活・学校生活に徐々になじんでいった。しかし，行動範囲が広がると共に一人でトラブルに直面し〈ギャー〉と大声で叫ぶパニックを起こすこともあったようである。3・4年時の担任に「育成学級に移ってはどうか」と提案された際，初めて脳波検査を受けているが結果に異常はなかった。行動的には，全くハミ出し，普通学級で一緒に授業を受ける体制はとれていなかったものの，突出した記憶力で日本地図での地名，都道府県名，山，川などを知っているのはもちろん世界地図でも国名，地名などよく知っており，上級生が休み時間に自分の宿題の白地図を持ってきて記入させたりしたことがあった。5・6年時にはクラスメイトに世話されることを嫌がるようになり〈わぁー〉と喚く等のパニックを起こした。

小学校時には，各学年で必要とした読み，書き，計算はそれぞれの時期にマスターしていた。

(3) 中学校

中学校でのクラス分けは，小学校時の担任が，Kの世話役を付けてクラス分けをしてくれた。そのため，1年の時は，小学校時代からKにかかわってくれていた生徒達に嫌がられるような行動は修正され，他校から来た生徒達から嫌がらせを受けた時は助けてもらえた。また，小学校時代から「Kのお父さん」と言われている保護者的存在の生徒がいて，Kが困った時は助け保護してくれ，Kのタドタドシイ日常会話の通訳もしてくれた。

2年のクラス編成で，保護者的存在の友だちとクラスが別になり，当初は不安でパニックを起こすことが度々であった。

3年は，高校進学のため，生徒たちはそれぞれ自分の進路を決めるのに不安な時期である。その中で，Kは，彼より学力の低い生徒から「お前がいるから，わしが○○校に行かれへん」と言われ，殴る，蹴るのいじめを数回受けたり，教師からは彼の特異行動のため「○○校の受験は無理」と言われたりしたが，母親の粘り強い教師との交渉により公立高校を受験させてもらえた。

中学校では，特に2・3年時に心理的・身体的いじめを受け，Kのパニックは激しく，頻度が多かった。

(4) 高校

公立高校1類に合格したため入学前に筆者Tは，高校長と担任教師にKのことの説明を行った。

1年時，Kの持ち物がなくなった時など大声で喚き散らしていた。担任教師は，その都度，Kと共に学校中探してくれたり，Kが授業中，騒ぎたてたりする（消しゴムが飛んでくる）ことがあると，それに対しても，時間の許す限り授業中教室の後に立って見張ってくれたり細かい援助をしてくれた。

高校の3年間，英語と数学は理解でき，良い成績であったが，国語は殆ど理解できず，テスト前日，母親が付きっきりで暗記させ，どうにか落第をすることなく卒業できた。

(5)　専門学校

本人の希望によりコンピュータ専門学校に入学。入学後，5月連休明けに学校より筆者Tの所に連絡があり，理事長と話し合いを持った。

この専門学校では，クラス担任制はないが，Kは入学式当日，受け付けで最初に出会った教師を頼りにしているようなので，その教師がKのことを見守って援助をすると申し出てくれた。授業にはほとんど遅刻することなく，いつも教師の真前の席にいたが，ところかまわず大欠伸をすることがあった。

コンピュータは得意とするようで，操作はよく知っていて，理解できない生徒の操作を勝手に行いトラブルを引き起こすことが度々あった。

ここでのパニックは，Kが恐がる「パーマン（キャラクター）」と誰かが小声で言い，授業中に騒がすことであった。階段などでパニックを起こすと全館にひびきわたるような大声で〈わー，わー〉と騒ぎ立てていた。

本来は2年で卒業であるが，Kは専修科に進み3年で卒業した。

(6)　就業期

専門学校卒業後，A作業所に通い始めた。学校を卒業し勉強中心の生活ではなくなると，日常生活の細々としたことにも注意が向くようになったためか，家庭内で家族と衝突しパニックを起こすようになった。また，学校社会とは違った複雑な人間関係に直面したり，作業所において指導員に行動を強制されたり叱られて，パニックは再び増加した。しかし，A作業所では，パニックを起こすと指導員に暴力を受けたため，Kは意識的あるいは無意識的にパニックを抑制したようである。母親がこのような状況を知り，A作業所の指導方針に賛同できなかったため1年で辞め，現在のB作業所に移り今年で6年目になる。

現在，B作業所では，主に通所者と共にパン作り，紙作り，農作業等をする一方，パソコンを使った経理の仕事も手伝っている。また，宿泊訓練では，スタッフの指導のもとに身辺自立のできていない通所者の援助も行なっている。ただ，時々，自分勝手な行動で指導員から注意を受けている。

Ⅲ　日常行動とコミュニケーション

Kは京都女子大学児童心理・教育研究会で行なっている療育トレーニング（以後セラピーとする）に月3～4日参加している。Kは他の青年自閉症者と共にゲーム等のレクリエーション活動を通して対人関係・コミュニケーションの向上をはかろうとするセラピーや，音楽に合わせたリズム体操を通して，自己コントロールを体感するセラピーに参加している。そして，セラピー終了後も学生に交じって机に向かい，自分の好きなこと（例えば，日本語大辞典を読む，絵の具でグラデーション表を描く等）に熱中し，筆者Tが帰る頃まで共に過ごすことが習慣になっている。学外では，月1回社会適応訓練を行なっている自閉症者の会「どっかいこう会」に参加し，ボランティアと共に様々な所へ出かけたり，野外活動に参加している。

このように，Kは自ら若者の輪の中にいて，自分から喋りかけはするが，“どうして～したの？”というような質問に〈はい〉と答えるだけで会話に進展しないことが多い。あわせて，Kは相手の婉曲表現を字義通りに受け取ってしまったり，ユーモアや冗談を言っても通じないところがある。

Kの話し方は，抑揚があまりなく単調で声も小さく，相手に対して話すというよりボソボソと独り言のようにやや早口で話すため，慣れない相手には非常に聞き取りにくい。ことば使いも独特で，誰に対しても丁寧な「です・ます」調を使ったり，日常会話において非常に難しいことばの言い回しを頻用するため，非常に堅苦しく違和感を感じることが多い。時には，人称・助詞・助動詞表現の誤用，受動と能動の混同があるため，Kの言いたいことが相手に伝わり難い。

感情については，パニック時に〈誰の責任ですか〉等と声を荒げて話す様子からKの怒りの

感情は伝わるが，それ以外の会話場面では殆ど無表情であり，「嬉しい・楽しい」という感情は直接語られることもなく，周りの人には殆ど伝わらない。

また，Kは人の顔を覚えることが大変苦手で，長年付き合いのある人でも名前を忘れたり，別の人と混同することが多々あった。しかし，ここ1・2年の間に，セラピーや「いこう会」で共に過ごす者数人の名前を覚えるようになった。その他にも，研究室に学生たちと一緒に食べるつもりでお菓子を持ってきたり，特定の親しい人の誕生日を覚えていてプレゼントを贈ったりする等の気配りをするようになった。

Ⅳ　パニックについて

自閉症児・者のパニックは，彼らが①予測できないことに遭遇したり，危急の状態におかれ不安に陥った時，②同一性保持が保障されなかった時などに防衛反応，逃避反応として現われる。

Kの場合のパニックは，他人から何か自分の意に反することを言われたり，自分の意に反することが起こった時や，自分が何かで失敗した時など，気持ちが高ぶった時などに起こり，その現れ方は，手を顔の前にかざしパチパチと音がする程の速さでヒラヒラとさせたり，〈わぁ―――〉と叫んで，鼻や後頭部を速いスピードで叩き続けたり，ドタドタと足を踏みならして暴れたり，などである。

手をヒラヒラさせるというような常同行動は，一般的に知的障害を伴う自閉症児・者に現われるものであるが，高機能自閉症であるKにもこのような行動がパニック時にみられる。

Kのパニックと自閉的行動の変遷は，**図2**に示す通りである。

Kは幼児期，家庭において非常に可愛がられ，家族の愛情を一身に受けていた。そのため，自然に周りの者がKの好みに合わせた環境を作り上げ，Kの同一性保持の欲求は保障されており，パニックに陥ることはなかったと思われる。

保育園，幼稚園の中では，周りに無関心で，まだ「こうあるべき」という思いが本人の中に芽生えておらず，ここでも，Kの同一性保持の欲求が脅かされることは殆どなかった。

行動範囲の広がった小学校3年生の時に，Kは他人の車に入り込み，警察沙汰になったことがあった。その時に，Kは何を聞かれても〈ぎゃ―――〉と叫び続けるというパニックを起こした。

また，小学校高学年になると，他人にいろいろと世話をされることに反発するために，〈わぁ―――〉と喚くという行動がみられるようになった。

Kのパニックは，中学校の頃，友だちからのいじめがひどかった時，先生にひどいことばを浴びせられながら受験に取り組んでいた時と社会人になってからが一番激しく，頻度も高かった。

現在は，予定の時間通りにスケジュールが進まないのではないかという不安にかられた時や，自分が何かに集中している時に他人から邪魔された時，他人から叱られた時，相手と衝突し自分の思いが通らない時などに，パニックを起こしている。

学校を卒業すると，それまでの勉強に集中する生活でなくなり，日常生活の細々としたことにもKの注意が向くようになった，そのため家庭内で家族と衝突し，パニックを起こすようになった。また，学校という保護された受け身の世界から社会に出て働き始めると，学校社会よりも複雑な人間関係に直面したり，作業所において指導員に行動を強制されたり叱られてパニックを起こすなど，全体的にKのパニックは再び増加した。

Kの母は，Kが一人で自由に外出する中で，連絡がとれるように，Kに携帯メール端末を持たせた。

Kは，携帯メール端末を使うようになった頃から現在に至るまで，対人関係等で何かトラブルがあると，Eメールでその出来事とそのことに対するKの気持ちを伝えるようになってきている。当初，送信先は母親だけであったが，次第に送る人が増えてきている。そして，メールを送ることにより，気持ちが発散されているのか，パニックの回数も以前より減少し，その激

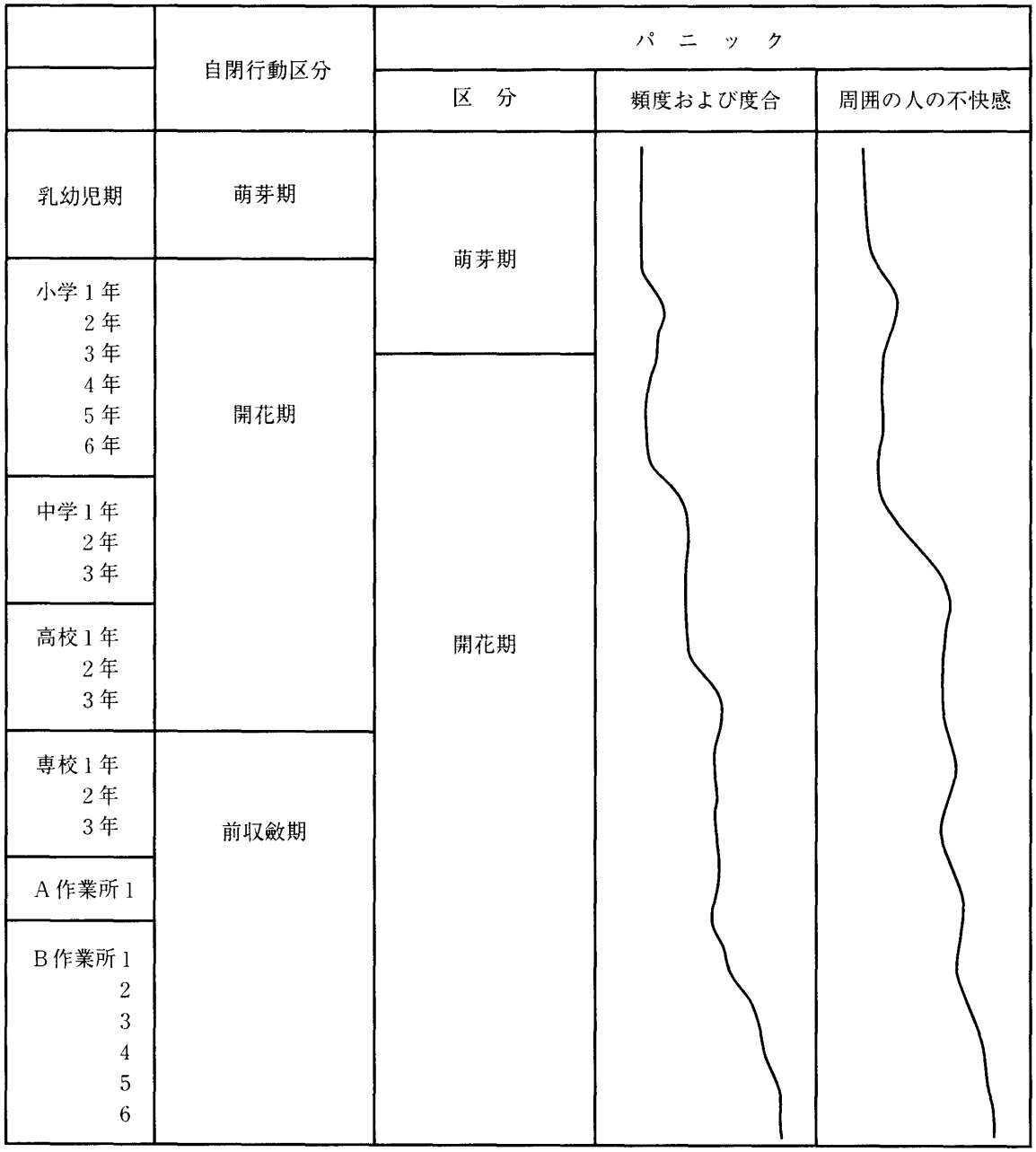

図2. Kの自閉的行動の変遷とパニック

しさも軽減してきている。

V　Eメールによるコミュニケーション

1999年6月から2000年11年までの1年半の間に，Kは筆者OとTに対して60通のEメールを送っている。60通のメールのタイトルと文字数，メールの感情について**表2**に，メールの終わり方については**表3**に，**表4**には月別メール数を示す。

表4からわかるように，KのEメールは，1999年6月，7月，9月は一般的伝達が3通あるだけであったが，2000年の3月から増加していった。KのEメールは，トラブルを訴えるメールと楽しい出来事などを報告するメールの2種に大別でき，トラブルを訴えるメールは38通，楽しい出来事などを報告するメールは23通，両方の内容を含むメール1通であった。

楽しい内容を伝えるメールは，2000年の8月に多く，筆者Tが共に過ごしている時，筆者Oや他の知人に送っている。それは，『花火のすごさ』・『湯布院の夜景』・『湯布院の虹』等で，タイトルを目にするだけでKの気持ち・情景が伝わり，文面からはKの楽しんでいる様子・気持

表２．Ｋのメールのタイトルと文字数

	月　日	題　名	内容	語数	！数	～数	備考
1	1999年６月６日(日)	Ｋから	＋	14			
2	７月31日(土)	Ｋから	＋	14			
3	10月11日(月)	水泳	＋	111			
4	2000年３月17日(金)	届きましたか？	＋	12			
5	３月27日(月)	仕事場に怒られた	－	50	2		
6	３月30日(木)	めちゃくちゃな家族	－	101			
7	３月31日(金)	冷たい仕事場	－	77			
8	４月16日(日)	洗剤ボトルの始末	－	265	5		
9	４月17日(月)	朝の大怒り	－	474	10		
10	６月１日(木)	給料を紛失したことの心の傷	－	179			
11	７月２日(日)	逮捕されるかも	－	811	5	3	
12	７月２日(日)	前のメールの続き	－	451	10	10	
13	７月２日(日)	三回目のメール	－	225	28	33	
14	７月２日(日)	床の件	－	369	40	33	
15	７月11日(火)	祇園祭	＋	389	2		
16	７月13日(木)	決まりが法律中の法律	－	451	44	30	
17	７月13日(木)	決まりが法律中の法律	－	451			
18	７月14日(金)	もう終わり????????	－	492	115	93	
19	７月14日(金)	高いところからの夕食	＋	212			
20	７月27日(木)	夏の外出のこと（プールと海）	＋	389			
21	７月28日(金)	花火のすごさ	＋	328			
22	８月１日(火)	花火と甲子園、祭りなど	＋	820			
23	８月４日(金)	洗剤が法律	－	492	49	17	
24	８月５日(土)	サイン会とキャンプ	＋	1230			
25	８月６日(日)	おみやげとサイン会	＋	369			
26	８月10日(木)	網野のキャンプ	＋	1312			
27	８月12日(土)	帰りと劇の練習	＋	738			
28	８月18日(土)	エアコンとパソコンは法律	－	779			
29	８月20日(日)	おみやけ買いました。	＋	185			
30	８月20日(日)	湯布院の夜景	＋	287			
31	８月21日(月)	湯布院の虹	＋	328			
32	８月21日(月)	ご飯の歌とキャンプ	＋	574			歌４曲
33	８月22日(火)	厳しい掟	－	410			
34	８月23日(水)	ソニックの中と大分の街	－	738			
35	８月26日(土)	エアコンで病死????????	－	1025	30	37	
36	８月30日(水)	電器が壊れてしまった!!	－	984			
37	８月31日(木)	また怒られた!!	－	697			
38	９月１日(金)	深夜のエアコン	－	1066			
39	９月２日(土)	冷房永遠に？	－	1271			
40	９月２日(土)	電器が玩具?????	－	984	19		
41	９月２日(土)	漂白剤に名前が書いている	－	451			
42	９月２日(土)	左耳に血が	－	615			
43	９月３日(日)	ミュージカル	＋	615			
44	９月10日(日)	タオルが雑巾、しかも法律??	－	574			
45	９月18日(月)	誕生日のプレゼントなど	＋	656			
46	９月21日(木)	エアコンの電気代が無駄？	－	451			
47	９月21日(木)	焼肉と寿司の参加者	＋	492			
48	９月24日(日)	焼肉の日程、決定!!	＋	738			
49	９月26日(火)	お母さんに大大大怒り!!!!!	－	943	20	19	
50	９月26日(火)	蚊取り線香も永遠	－	656	30	18	
51	９月28日(木)	規則も法律?????	－	1025	30	19	
52	10月２日(月)	踏水会がしごき場?????	－	656			
53	10月５日(月)	もっともおかしな家族	－	574			
54	10月29日(日)	禁しられた二つ	－	574			
55	10月29日(日)	もっと禁しられすぎたやり方	－	369			
56	10月29日(日)	人生の破綻、超超残酷な死に様	－	943	117	56	
57	11月14日(火)	暖房までも法律か?????	－	615			
58	11月20日(月)	鞍馬と家の問題	±	656			
59	11月23日(木)	こだわりも法律????????	－	820			
60	11月30日(木)	カナート洛北	＋	861			

内容　＋：楽しい報告、－：トラブルを訴える、パニック表現、±：両方を含む

表3．メールの終わり方とパニック表現

	終わり方	パニック表現
1	つながっていますか？	
2	いらいていますか？	
3	お願いします！	
4	しました！	
5	してしまいました！！	
6	母にも送ってください。	
7	どう感じますか？	
8	そういってください！！！！！	
9	心配です。	
10	詫びてくれない？	
11	本当に恐いよ～～～！！！！！	
12	本当に悲しいよ～～～～～！！	
13	！！！！！！！！！！！！！！	
14	（１０００兆ホンの大声で）	
15	それだはおやすみ！	
16	！！許して～～～～！！！！！	
17		
18	１無量大数＝１０の８８倍	超超活火山
19	期待したいと思うけど・・・・・・	
20	じゃ、おやすみ。	
21	じゃ、おやすみ。	
22	それじゃあ！	
23	？？？？？？	
24	それでは、	
25	お願いします。	
26	それだは。	
27	それだは・・・	
28	さようなら・・・・・・（小さい声で）	９９９９京度　大大暴走　超超活火山
29	頼むよ。それじゃ！	
30	じゃ、おやすみ・・・・	
31	以上です。	
32	おやすみ・・・	
33	おやすみ・・・	
34	以上です。	
35	・・・・・・（小さい声で）	超超超超超（最大出力、最大音量、大爆発強制）
36	さようなら・・・・・・・・	９９９９京（京＝１０００兆×１０）
37	さようなら・・・・・・・・	
38	それでは、おやすみ。	
39	それでは、おやすみ・・・	１０００％　９９９９京
41	それでは	
42	それでは・・・・・・・	
43	それじゃ！	
44	それでは・・・	９９９９京
45	おやすみ・・・	
46	さようなら・・・・・	９９９９京
47	おやすみ・・・	
48	おやすみ・・・	
49	さようなら・・・・・・・・	超超超超超活火山　大大大大大怒 パンパンパンパンパンパンパンパンパン
50	さようなら・・・・・・・・	超超超超超超超超（活火山、大声）パンパンパンパンパン
51	さようなら・・・・・・・・	超超超超超超超超（大声、暴走、活火山）大大大大大怒
52	それでは・・・・・・	
53	おやすみ・・・	
54	以上です。	
55	以上です。	
56	さようなら・・・・・	超超超超超超超超（大声、活火山、大おこり）９９９９京
57	さようなら・・・・・・	大大大大大（爆発、怒り）超超超超超活火山
58	おやすみ・・・・・・	
59	さようなら・・・・・・・・	
60	おやすみください。	

表4．Kの月別メール数

年	月	－（トラブルを訴える）	＋（楽しい報告　他）
1999年	6月	0	1
	7月	0	1
	8月	0	0
	9月	0	0
	10月	0	1
	11月	0	0
	12月	0	0
2000年	1月	0	0
	2月	0	0
	3月	3	1
	4月	2	0
	5月	0	0
	6月	1	0
	7月	7	4
	8月	7	9
	9月	10	4
	10月	5	0
	11月	3	2
計		38	23

ちが伺われるが，共にその時を過ごしている筆者Tにはそのような語りかけはなく，いつものように無表情で〈明日は何時に行きますか〉とか〈キャンプは久重ですか〉というように，次の日程を気に掛けており，共にいた筆者Tには，彼がそのように楽しんでいたことは伝わってこない。また，8月23日の特急ソニックの中で，豆腐のアイスクリームを食べた時は，筆者Tも一緒に食べ，Kは食べながらEメールを打っていたのか，「おいしいから食べませんか」という文面だった。このように，Kは好きな事，思いついた事，やってみて楽しかった事を「今度はぜひ一緒にやりましょう」と誘いかけるメールを送るようになった。

トラブルを訴えるメールは2000年の9月に多く，『冷房永遠に？』・『お母さんに大大大怒り！！！！！』・『規則も法律？？？？？』等の，臨場感あふれるタイトルがつけられている。**表3**を詳しくみていくとメールの文字数の多い日で『！』と『～』の多い日は，18通目（7/14）と56通目（10/29）である。その日のメールの内容を**メール1・2**に示す。

メール1の内容をみていくと，Kが日常パニックに陥った時，口を衝いてでてくることばそのままで「ぼくは1時間で9999京発手で鼻，顔，頭を猛烈にたたいたり，」とメールに打ち込んでいる。メールを打ち込むことによって，パニックに陥った時，メールに書かれているような行動は見られていない。

また，文末に「もう終わりだ」ということばがあるが，Kのパニック時のことばを聞いていると，そばに居る者は，あまりにもオーバーなのでおかしくなることがあるが，文面をみていると，Kがどれ程大きいショックを受けているのか，どんなに辛く思っているのか伝わってくる。

メール2でも母親のパソコンを勝手に操作してしまい叱られてのことだと思われるが，興味のあることについ手を出してしまって，K自身は，後悔しているようである。文末にあるように「自分の命ももうわずかかもしれませんが……」というように，自分が罰せられると思っているのか罰に価するいけないことをしてしまったと思っているようである。

また，**表3**のメールの終わり方でわかるように「10．詫びてくれない？」「11．本当に恐いよ～～～」「12．本当に悲しいよ……」「16．！！許して～～～」などは，Kの気持ちの辛さが伝わってきて，「あんなことで，そんなに心を痛めるのか」と自閉症の感情について私共は，もっと気付いてやらなければならないことを痛感した。

subject：もう終わり？？？？？？？？？？？

Oさんへ

今日、会社の機械を仕事以外（休憩など）で勝手に触ったことで、上司に超超活火山みたいな超大怒りにされてしまった～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！（9999京｛けい｝ホンの声で・１京｛けい｝＝1000兆の10倍）それを聞くとぼくは１時間で9999京発手で鼻、顔、頭を猛烈にたたいたり、「ア～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！！！！！！！！！！」と9999京ホンの声をだしてしまって、身も心も完全になくなったほど、猛烈に大暴れしてしまった！
！！！！！！！！！会社のパソコンも結果的には統一的全宇宙の法律だと思われるよ。その罪はアリゾナ海溝より深くて、エベレスト山より重いと思うらしい。そうしてしまったら、逮捕されてしまって、いずれは剣できられ死ぬかもしれないみたい。きられる剣は刃が１分間で9999京回転するもので、炎、光、電気、重力、電磁力ましてしまうらしい、その剣は9999京本あって、それだ9999京回きられてしまうかもしれないみたい。もう助からないみたい！！！！！！！！！！！！！！！

――――略――――！！――――略――――――――――――――――――――――――――――――――
？？？？？？？？？？？――――略――――！！！！！――――――――――――――――――
―――――――――――――　――――――もう終わりだ～～
～！！（9999無量大数｛むりょうたいすう｝ホンの音の力の声・１無量大数＝10の88倍）

メール１　Ｋのメール

subject：人生の破綻、超超残酷な死に様

先生――――――――――――――――略――――――――――――――――

さっき、おかあさんの仕事先や知り合いの電話やメールを移したこと、それを使って、紹介することやおかあさんの車のテープを家へもって帰ったりするなど全宇宙の統一法律、掟、規則で禁じられたものをやってしまいました。おかあさんに9999京（けい：１京＝1000兆×10）デシベルの超超超超超大声をだし、体温も9999京度まであがり、そして天地人をついて、突き超超超超超大おこりをされてしまいましまし
た！！！！！！！！！！！それだ１秒間に9999京発鼻を激しく激し
くたたき、そして、9999デシベルの超越超超超大声をだしてしまいまし
た！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！パンパパンパンパパンパンパパンパンパパンパンパパンパンパパンパンパパンパンパパンパンパパンパンパパンパンパパ
ン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！あ～～
～！！さらにテレビの音も最大までだ
してしまいました。そうなると捕まえられ、ドリル（9999東回転／分）みたいな超科学の剣や楯などで滅多切りか滅多刺しの刑にさらされるのか、火山のマグマの入れられるのか、9999京個の水爆の刑にされるのか、怪獣のいけにえにされるのかどのみち、もう体もなく骨もなく、ついに無のままになってしまいそうです。このメールをみなさん、おかあさんみたいに9999京デシベルの超超超超超大声をだし、9999京度の体温までもだし、天地人をついてつくほど超超超超超活火山みたいで、毛細血管がたたみかけて切れるほど、大大大大大怒りほどのメールをだしそうです。――――――略――――――――――――――――――――――自分の命ももうわずかもしれませんが、伝えてください。さよなら………

メール２　Ｋのメール

ただ，日常Kの行動をみると，パニック行動の激しさのみが目立って，Kの本当の心の中の辛さはなかなかわからず，共感することができない。

私共はKを目の前にしていないにも拘らず，何が起こったのか，何に対してKがパニックを起こしているのか，その文面から読み取る事が可能である。

また，このメールは携帯電話にも送られてきて，携帯電話では，画面が小さいので「！！！！！・・・・・」「アアア・・・・」とか「？？？？？？？・・・・・」で画面がいっぱいになることもあるが，相手に伝えることよりメールを送ることでKの気持ちはかなり落ち着くようであった。

V　結果と考察

自閉症者は，一般に，言語表現が未熟，不十分であるため，自分の思いを相手に伝えることが苦手であり，他人にうまく伝わりにくいことが多々ある。特に，パニックに陥った時その気持ちを上手に人に伝えることができない。「自閉症者は，一般的に発声言語よりも文字言語の方が自分の思いを表現できる」ということにヒントを得て1999年よりEメールで交信をするようになった。

このことによりKの対人関係・コミュニケーションには，大きな変化があった。

1．コミュニケーションの中でKの気持ち・感情などの内面が伝わる

Eメールを通じてKの気持ち・感情などの内面を知ることが可能になり，Kとかかわる私共がKに共感することができるようになった。これまで何を考えているか不可解であったKという人物を，より身近な存在に感じられるようになった。そして，Kの思いや感情をもっと理解したいという気持ちから，以前より私共の方もKとのコミーニケーションを楽しむようになり，それと同時にKの方もコミュニケーションを楽しむようになっていったように思われる。事実，KとのEメールのやりとりは増加し，筆者Oだけでなく，複数の知人にメールを送り，今ではKの中でメールというものが一つのコミュニケーション手段として定着したようである。

2．コミュニケーションの中でKの方からの働きかけの増加

Eメールの中では「一緒に～しましょう」とKの方からの誘いが見られた。これまで面と向かった会話の中ではそのようなことばを耳にしたことがなく，団体行動の中にいても単独行動が目立ち，何でも一人で処理してしまうように見えていたKの行動からは，とても想像できないものである。

そして，対面でのコミュニケーションにおいても，例えば研究室へ旅行のお土産を持ってくるなどの気配りが見られるようになり，Eメールという一つのコミュニケーション手段が加わったことによって，Kのコミュニケーションは広がりを見せている。

3．パニックについての言語化とパニックの激しさ・頻度の減少

Kの場合，パニックを起こし，何かしら叫んでいる状態を目の前にしている時よりも，Eメールで伝えてきたことばを読む方が［Kの思い］，［その状況のどこにつまずいているのか］，［どのようなことが納得できないでいるのか］ということが明確に伝わってくる。このことから，Kがどのようなことに固執があり，どのような場面でトラブルになりやすいか，パニックにつながるのか，ということが明確になってきている。

Kは，学校生活を終え一般社会に出ると，社会的常識・マナーでのトラブルが増え，パニックも増加した。Kがトラブルに直面した時に，私共に携帯メール端末で知らせるようになった頃より，Eメールを送ったことで気持ちが発散されるのか，Kのパニックは以前のような「ドタドタと足を踏みならしながら暴れたり大声を出すという周囲を巻き込む程の激しい表出」は軽減しパニック自体も減少する傾向にある。このことはKのパニックが［①抑えられない衝動を爆発させているもの］であると共に［②本人が周りの人に自分の思い・気持ちを伝えたい，理解してほしいという気持ちで起こしている］という要素を持ち合わせたものであることを示

している。

そして，KからのEメールに返事が出せないでいると，再度「どう思いますか」とEメールを送ってくることもある。つまり，Kは送るだけで満足しているのではなく，自分の気持ち・思いを伝えた時の相手の気持ち・感情にも強い関心をもっているのである。このような気持ち・感情の働きは，人と人がコミュニケーションを持とうとするうえで重要な動機づけである。

以上のようなKの事例を通して，今後の高機能自閉症者のパニックを軽減すると共に，コミュニケーションの拡がりを助けるための一手段として，Eメールを媒介とするコミュニケーションは有効であると考える。

参　考　文　献

1．Asperger, H. (1994)：Die "Autistischen Psychopathen" im Kindesalter. fur Psychiatrie und Nervenkrankheiten, 117
2．アルフレッド・ブローネ，フランソワーズ・ブローネ著　布施佳宏，古田廣訳（1993）自閉症児の表現―ことば・造形・音楽・数の事例―.二瓶社
3．Baron-Cohen, S. (1988)：An assessment of violence in a young man with Asperger's synrme. Br. J. Psychiatry, 29；351-360
4．チャールズ・ハート著　高見安規子訳（1992）・みえない病―自閉症者と家族の記録―晶文社
5．G．ドーソン編，野村東助，清水康夫監訳(1994)：自閉症―その本態，診断および治療―第1部自閉症児の社会的障害の本態について．日本文化科学社
6．星野仁彦(1999)：アスペルガー症候群の成年期における諸問題．精神科治療学 Vol.14 No.1 jan
7．石井哲夫，白石雅一著(1993)：自閉症とこだわり行動．東京書籍
8．加藤洋二(1991)：自閉症児に学ぶ．こころの科学37号．日本評論社
9．郭麗月(1995)：自閉性障害者の余暇活動についての一考察．日本児童青年精神医学会抄録集
10．久保紘章（1991)：自閉症と家族．こころの科学37号．日本評論社
11．小林重雄（1980)：自閉症―その治療教育システム―．岩崎学術出版社
12．小林重雄(1982)：自閉症児の集団適応―社会的自立をめざす治療教育―．学術研究社
13．小林重雄（1988)：情緒障害児双書②　自閉症
14．小林重雄(1991)：学校での能力開発プログラム．こころの科学37号．日本評論社
15．小林重雄（1991)：青年期・成人期の自閉症．こころの科学37号．日本評論社
16．熊谷高幸(1993)・講談社現代新書　自閉症者からのメッセージ．講談社
17．栗田広(1993)：アスペルガー症候群．精神科治療学 Vol.14 No.1．jan 1999
18．皿田洋子（994)：ソーシャルスキルズ・トレーニング　分裂病患者への適応．精神科治療学 Vol.9 No.9．星和書店
19．瀬戸屋雄太郎，長沼洋一，長田洋和他（1999)：WISC-Rによるアスペルガー障害およびその他の高機能広汎性障害の認知プロフィールの比較．精神科治療学 Vol.14 No.1．
20．志賀利一他，朝日新聞厚生文化事業団編著(1995)：朝日福祉ガイドブック　続・大人になった自閉症児．朝日新聞
21．杉山登志郎，高橋修(1995)：自閉症と就労．日本児童青年精神医学会抄録集
22．杉山登志郎（1995)・自閉症児への精神療法的接近．精神療法，21
23．杉山登志郎（1998)：Asperger 症候群．風祭元総編集，栗田広専門編集；精神科ケースライブラリー，児童・青年期の精神障害．中山書店，東京
24．杉山登志郎（1999)：アスペルガー症候群と心の理論．精神科治療学 Vol.14 No.1
25．杉山登志郎（2002)・Asperger 症候群と高機能広汎性発達障害．精神医学 Vol.44 No.4
26．宮内勝（1994)：ソーシャルスキルズ・トレーニング理論とその展開―総論―．精神科治療学 Vol.9 No.9．星和書店
27．村田豊久（1999)：子どものこころの病理とその治療．九州大学出版会
28．隠岐忠彦他(1982)．自閉症の人間発達学．誠信書房
29．太田昌孝(1995)：高機能自閉症．発達障害研究，17
30．太田昌孝他編(1995)：自閉症治療の到達点．日本文化科学社
31．太田昌孝(1999)：アスペルガー症候群の成人精神障害．精神科治療学 Vol.14 No.1
32．高木徳子，安部法子（1989)：自閉症児・者のパニックについての一考察．児童学研究19号
33．高木徳子（1994)：ソーシャルスキルズ・トレーニング自閉症児・者への適応．精神治療学 Vol.9 No.9．星和書店
34．高木隆郎・谷晋二（1991)：自閉症児の行動療法．こころの科学37号．日本評論社
35．Tantam, D (1991)：Asperger syndrome in adulthood. In：Frith, U. Atutism and Asperger. Cambridge University press, Cambridge, pp147-183
36．Tinbergen, N. &Tinbergen, E. A (1984). Autistic children：New hope for a cure. Verlagsbuchhandlung Paul Parey, Berlin. 田口恒夫訳（1987)，改訂『自閉症・治療の道―文明社会への動物行動学的アプローチ』新書館
37．Wing, L. 著　久保紘章他訳（1980)：自閉症児．川島書店
38．Wing, L. (1981)：Asperger's syndrome：a clinical account. Psychol. Med, 11
39．Wing, L. (1996)：The Autism Spectrum.

Constable, London.
40. 山中康裕（1984）：精神医学入門　問題行動
41. 若松かやの，柴田由美子，古元順子(1995)：重度自閉症児とのコミュニケーション―書字をとおして―．日本児童青年精神医学会抄録集